優秀賞

所作の美に感動して

日本航空高等学校石川三年（石川県）
島　美朱

私は高校生になってから茶道について学び始めました。新しいことを学ぶというのはとても難しいものであり、先生のような無駄の無い品のある所作を初めて見た時には、呼吸を忘れ、ただ一心に見ていたのを覚えています。人の動きにはそれぞれの魅力もあり、またその魅力をその人がどれほど引き出せるのかによって同じ仕草でも全く別のものに変わってしまうのだと実感したことがあります。それは、茶道を始めてしばらくした頃です。動きが分かってきたとしても、緊張や力加減の違いで全く落ち着きのない作法となってしまったり、私は左利きだったため右手で物を持つということに慣れておらず最初から最後までの動きが途切れ途切れになってしまっていました。毎授業の度に中々思い通りに出来ない自分に対し、とても悔しかったです。ですが、先生のお手本はいつ見ても透明感があり、見ているこちら側も清々しくなるようなものでした。それは思い通りに出来ず苦しむ私にかまわず、憧れを抱かさせてくれるような、まだまだ諦めたくないと思えるような美しさでした。

「私もいつかは先生のようになりたい」、また「もっともっと」と向上心も増しました。

ですが、想いが強まったとしてもすぐに身に付けられないのが美しさです。

そのため、まずは作法が完璧でなくても、自分が作法をする時には心を落ちつかせ、焦らず、丁寧に一つ一つの動きに気持ちを込めるようにしました。すると、今まで視界に入れることが出来なかった一つ一つの道具の形、色、部屋の空気や音などを感じとることができました。その時初めて観ている側ではなく作法をしている側の立場で感動し、とても集中していました。

私はその時をきっかけに授業中でもシャーペンを右手に持ち、黒板を左手で写した後には右手でひらがな・カタカナ五十音をくり返し描き、右手を使う感覚を身につけられるように意識してみたり、流れを把握するために、休み時間に教本を読むようになったなど、一つの感動に感動が重なると行動にも変化が現れました。私は、その後も茶道の授業に対する意識が変わり、今ももっともっと学びたい、身に付けたいと感じることばかりです。

茶道は美しいけれども、難しく、私には向いてないのか

もしれない、と感じ諦めたくなる時が何度も何度もありました。しかし、その度に先生の所作を見ると、やっぱりまだ終わりたくない、離れたくないと感じさせてくれるのです。

始めの頃は、きまりが沢山あり、上手くできない事に苦しさを感じることがありましたが、今では、所作の美しさのとりこです。私の心に響き心を奪われるような美しいもの、「茶道」に出逢えたことに感謝いたします。そして、私の精神面も成長に導いてくださった先生にも巡り会うことが出来、私にとって茶道とはまだまだ未知の世界ではありますが、美しさの塊であることには変わりありません。これからも心を奪われ、感動を共有できるようになりたいです。